

◎ 博士後期課程設置記念式典およびシンポジウム開催

平成19年5月30日(水)、博士後期課程設置記念式典およびシンポジウムが大学会館の多目的ホールにて開催されました。この報告は国際学部HPで見られます。アドレスは以下のhttp://www.afis.jp/mt-static/archives/DC_repo.pdfです。なお、当日式典に参加された大学院同窓会会長の挨拶を掲載します。

宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士後期課程 設置記念式典 挨拶

ただいまご紹介いただきました大学院国際学研究科同窓会（通称・知求会）の土屋でございます。僭越ではございますが、来賓として、祝辞を述べさせていただきます。

菅野学長を始め、各理事および大学本部職員の皆様、そして、博士後期課程設置の現場を預かる北島国際学研究科科長、担当の諸先生および国際学部の職員の皆様、また博士後期課程の学生の皆様、まことに設置おめでとうございます。設置までの道のりには多くの障害があったことと思います。その労苦に大学院同窓会の代表として、敬意を表します。

私事で言えば、国際学研究科 修士課程を7年前に修了し、他大学院の受験失敗を経て、現在 筑波大学大学院 一貫博士課程の5年目の最終学年を迎えました。当時の私たちは博士課程の進学の見込みが限られていました。進学希望者はそれぞれ、試行錯誤しながら各大学院に進学しました。来年、再来年には何人かの博士号取得者が輩出することと思います。このような状況の中、多くの同窓生の願いもあって、この度博士後期課程が設置されたことは、博士前期課程の学生諸氏において、強力な進学の見込みが用意されたこととなります。ただし、進学希望者にとっては、博士前期課程の修士論文の成果が問われることとなります。

さて、国際学研究科の同窓会の名称である知求会のモットーにアメリカのマサチューセッツ州出身の思想家、デザイナー、建築家、発明家、詩人のバックミンスター・フラーの唱えた「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」があります。すなわち、「地球規模であらゆることを思慮し、地域・例えば宇都宮に根差した活動を、各自のレベルで行動していきましょう。」ということもその選択肢の一つに含まれます。博士前期課程から後期課程に進学する方も、修士課程を経て、実社会で様々な経験を積み、博士後期課程に進学される

方も、このバックミンスター・フラーの言説に耳を傾けつつ、博士後期課程で研究することは、私のわずかな経験からしても大きな自己啓発のチャンスになるのではないのでしょうか。

平成 19 年 3 月で、国際学研究科の修了生が延べ 187 名になりました。また外国人留学生はそのうち約 4 割を占めています。他の研究科とは大きな違いがここに現われています。すなわち、国際学研究科の大学院生に対する教育・研究・福祉環境などは多様性が求められ、改善すべき緊急課題と申せましょう。留学生にとって、宇都宮大学は研究生活面ばかりではなく、日常生活面でも住みやすいのでしょうか？将来、博士前期課程もさることながら博士後期課程への進学する学生が増加し、留学生によるさまざまな視点からの研究成果あるいは提言が提起され、それに対応した研究・研究・福祉環境の整備を進めていただけると確信しています。

私たち大学院同窓会の役割は、修了生同士の交流のみならず、在学生のみなさんの学生生活や、就職活動に微力ながら支援していくことであると考え、様々な取り組みを行っているところであります。今後も大学と連携しながら、院生のみなさまとネットワークを緊密にしていきたいと考えております。

最後に、博士後期課程のみなさんは三年間、しっかりと研究課題を見極め、研究成果を学会ばかりではなくそれぞれの現場に還元できるように、充実したものとなるようお祈りいたしまして祝辞といたします。

平成十九年五月三十日

宇都宮大学大学院 国際学研究科同窓会 会長 土屋伸夫

◎ 宇都宮大学大学院国際学研究科公開授業の案内

国際学研究科では、ひろく一般社会人を対象に、「グローバル化と地域社会の変容」をサテライト公開授業として、以下の内容で**宇都宮市教育センター 修道館 研修室 501**(宇都宮市天神 1 丁目 1 番 24 号)にて開催されます。申し込み方法は、「公開授業参加希望」と明記し、住所・氏名・連絡先電話番号をご記入の上、「往復はがき」または「電子メール」にて、お申込み下さい。申込み先は、〒321-8505 宇都宮市峰町 350 宇都宮大学国際学部総務係 または Email:koksomu@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp です。

公開授業科目 **国際学総合研究 B「地域社会と現代 I」**

第 1 回 09 月 29 日(土) 午後 1 時から 4 時 **中村祐司**教授

- 「地域社会に生きる私たちと地域社会に生きる人々」
- 第2回 10月06日(土) 午後1時から4時 **片桐雅義**教授
「地域の国際化と私たちの行動」
- 第3回 10月13日(土) 午後1時から4時 **杉原弘修**教授
「グローバルな社会から見た苦情処理の態様」
- 第4回 10月20日(土) 午後1時から4時 **間遠伸一郎**講師
「資本のグローバル化と国際多文化主義」
- 第5回 10月27日(土) 午後1時から4時 **今井直**教授
「グローバリゼーションと人権」
- 第6回 11月10日(土) 午後1時から4時 **倪永茂**准教授
「地域社会の振興にみるインターネットの可能性」
- 第7回 11月17日(土) 午後1時から4時 **伊藤一彦**教授
「モンゴル社会の変容」

◎ 新刊案内

本年6月1日に、**中村祐司**先生が長年の下野新聞コラムの成果である『**“とちぎ発” 地域社会を見るポイント 100**』（下野新聞社）という単著を刊行されました。詳細は、次のアドレスで紹介されています。

<http://gyosei.mine.utsunomiya-u.ac.jp/kohokeiji/070605nakamurashinsho.pdf>

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞 平成19年3月31日(土)に、「多世代交流の場整備を」と題した**中村祐司**教授が関係している記事が掲載されました。
2. 下野新聞 平成19年4月10日(火)に、「政策競い合い関心喚起を」と題した**中村祐司**教授の記事が掲載されました。
3. 下野新聞 平成19年4月14日(土)に、「「成立は当然だ」「拙速だ」と題した**杉原弘修**教授の記事が掲載されました。
4. 下野新聞 平成19年4月30日(月)に、話題人コーナーで「古里を見つめ直す」と題した**田巻松雄**教授の記事が掲載されました。
5. 下野新聞 平成19年5月1日(火)に、還暦憲法の岐路で「最低投票率の議論必要」と題した**杉原弘修**教授の記事が掲載されました。
6. 下野新聞 平成19年5月4日(金)に、憲法施行60年で「平和めぐりぶつかる思い」と題した記事の中で**杉原弘修**教授が代表を務める市民団体の集会在報道されました。
7. 朝日新聞 平成19年5月9日(水)に、とちの記コーナーで「留学生のストレス発散に催し」と題した留学生センター・**若山俊介**教授の記事が掲載されました。

◎ 宇都宮大学各学部等同窓会連絡協議会報告

平成 19 年度第一回の会合が、5 月 12 日(土)午後 1 時半から宇都宮大学第 2 会議室で開催されました。出席者は菅野長右エ門 学長・水本忠武 理事・海野 孝 理事・山本純雄 理事・村松君雄 理事の大学側 5 名と事務局担当者 7 名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・阿久津嘉子 同事務局長・直之 進 工学部同窓会会長代行(同副会長)・安達久博 同副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会会長の同窓会側 8 名でした。議事内容は、検討事項として、1. 宇都宮大学博物館のグランドデザイン(案)について 2. その他や各同窓会からの活動報告・要望等、そして大学の現状報告等がなされました。

◎ 国際学部だより

1. 国際学部同窓会第 4 回定時総会・懇親会開催案内

来る 11 月 17 日(土)午後 3 時から宇都宮大学学生会館にて国際学部同窓会の第 4 回定時総会と懇親会が開催されます。詳細は国際学部同窓会 HP をご覧下さい。

<http://www.afis.jp/> なお、参加資格は国際学部卒業生で同窓会費を納めた方となっていますのでご注意ください。

2. 掲載記事紹介

読売新聞 平成 19 年 2 月 19 日(月)に、「フェアトレード」知って」で国際学部 1 年の橋本美穂さんのコメントが掲載されました。

朝日新聞 平成 19 年 2 月 25 日(日)に、「宇大生カフェ 途上国を応援」で国際学部 1 年の橋本美穂さんの記事が掲載されました。

下野新聞 平成 19 年 4 月 5 日(木)に、「ライブの姿そのままに」で国際学部 OB の梅田啓介さんらのロックバンド「キャプテンストライダム」の記事が掲載されました。

研究室訪問 14 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第 14 回目には、地球社会形成研究講座所属のスエヨシ アナ先生にお願いしました。

「ラテンアメリカ・経済成長から貧富格差緩和まで」

スエヨシ・アナ (SUEYOSHI Ana)

研究テーマ：ラテンアメリカ社会、政治と経済論、経済成長論、ラテンアメリカにおける

私は昨年4月から宇都宮大学の国際学研究科でラテンアメリカ社会論を担当しています。大学を卒業してから、世界各国の経済的ギャップの原因に興味をもち、研究者として¹、政策立案者として²、そのテーマと関連ある仕事をし、財政政策の観点からラテンアメリカの内生的な長期経済成長を主要テーマとして研究しています。宇都宮大学においても、この主要テーマをベースに二つの研究を行っています。一つは「ラテンアメリカにおける幸福と財政政策」、もう一つは「日系ペルー人労働者の来日の経済的な理由」です。

1) ラテンアメリカ及びカリブ海沿岸における長期経済成長と財政政策：内生モデルのアプローチ

本研究はラテンアメリカ諸国の1960年から2001年までの経済成長を研究したものである。長期経済成長の源泉としての財政政策の意義を内生的経済成長理論の枠組みでダイナミックパネルデータ分析を用いて検証したものである。GMM推定量を使って endogeneity と観測できない各国特有の効果をコントロールしている。研究対象の40年間、ラテンアメリカのいくつかの国は時おり国家中心の経済政策から市場志向型の経済政策に抜本的に変化した。経済改革とマクロ経済安定化プログラムの過程において財政政策は税や公共支出、債務、そして、消費、貯蓄、投資などのマクロ経済のレベルに影響を及ぼしてきた。本研究は財政政策と経済成長の関係について、先行研究では確定されていない経済成長の源泉の決定的な役割を強調しながら理論、実証両面から概観している。本研究で用いられているアプローチは経済成長に影響を及ぼすチャンネルと長期的経済の決定要因の同定を可能にしている。研究の結果言えることは、税と公共投資を通じた財政政策は、消費、貯蓄、投資、生産性に影響を与えながら経済成長に影響を与える、ということである。

2) ラテンアメリカにおける幸福と財政政策

過去25年にわたり、ラテンアメリカおよびカリブ海沿岸諸国における公共政策は、喫緊の課題とみなされていたマクロ経済の安定に焦点を当ててきた。1990年代に、マクロ経済の安定と構造調整がセットとなって当地域を席卷した際、市場の失敗を処理する手法としての公共政策は、最も脆弱な人口部門に対する好ましくない影響を最小化するための貧困撲滅計画によって補完されていた。私もその傾向に従い、これまで経済成長を貧困と貧富差の緩和という観点から研究³してきたが、昨年からはマクロ指標ではなく、ミクロ指標を分析することにした。ラテンアメリカの貧困と貧富差問題を解決するためには、第一段階として、経済成長が必要である。したがって、経済成長の要因を見つけることが貧困と貧富

¹ Sueyoshi, Ana. "Peru: Fiscal Policy 1970-1989". Research Notebooks Series N° 14. Universidad del Pacífico Research Center, Lima-Peru 1992. Co-authors: Bruno Seminario and Arlette Beltran.

² Sueyoshi, Ana. "State and Structural Reform in Peru in the 1990s." 国際政治経済学研究科 第8号 2001年9月、項45-64.

³ Sueyoshi, Ana. "ラテンアメリカ及びカリブ海沿岸諸国における：40年間におよぶ経済政策の動揺はまだつづいているのか?" 宇都宮大学国際学部 研究論集 第22号 2006年10月、55項-62項

Sueyoshi, Ana. "Chile and Mexico: The Early Reformers' Economic Policies are Bearing Fruit" 宇都宮大学国際学部研究論集、第23号、2007年3月、55項-65項

差の解決に影響を与えることになる。本研究は財政政策を中心に経済成長の要因を分析している。

本研究の目的は、幸福の諸要素を調査し、公共政策が幸福に与える影響を評価することである。ラテンアメリカを中心に分析を行い、特に事例としてペルーに焦点をあてる。個人の幸福は様々な定義が考えられるが、本研究においては行動分析学のアプローチに従い、「幸福 Happiness」の自己評価と定義する。従って幸福の物質的諸要素のみならず、主観的要素が考慮されている。

本研究は、主観的要素と物質的要素のより広範な集合体の、個人の幸福への影響を特定することによって、公共政策の幸福への影響を調査する。横断面とパネルデータの順序づけられた多選択の計量経済のモデルを方法として用いている。

3) 在日日系ペルー人、ペルー人デカセギ現象の経済的な理由

在日日系ラテンアメリカ労働者が顕著になってから、15年ぐらい既経った。経済目的で来日したにも拘らず、ラテンアメリカ諸国の経済事情に関係なく出稼ぎ現象は続いている。本研究では彼らが日本にいる経済的な理由を詳しく分析している。⁴

宇都宮大学において特定重点推進研究「外国人児童生徒の教育環境をめぐる問題」に参加し、1990年代の初期頃始まった日本におけるペルー人の出稼ぎ現象を、ペルー人労働者の世帯政策、バックグラウンドと希望の観点から研究している。

日系ペルー人の出稼ぎは、当初は家計の一時的な経済的困難に対処するためのものであった。彼らはペルー社会での恵まれた状況と引き換えに、ブルーカラーの仕事やぎりぎりの生活、彼らの価値観やアイデンティティー、寿命を蝕むような長期の滞在をしている。

このような状況は、一時的なものとしては理解できる。しかし、移住者の半数以上が10年以上も日本に住んでいるのである。いつまでも日本に滞在し続けているという彼らの決断の合理性は、生活の質に対する彼らの態度の変化によって説明できる。

以上のテーマやラテンアメリカ全体、スペイン語、ラテンアメリカ文化、政治などに興味がある学生と意見を交換できたらいいな、と思っています。いつでも相談にのりますので、気軽に声をかけてください。

博士録 02 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第2回目には博士号取得者・**キロワ イワノワ スベトラ**さんを予定していますが、まだ連絡が取れない状態です。どなたか連絡が取れる方は事務局までご一報下さい。

知究人 07 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(**ちきゅうびと**)を設けました。第23号の第7回目は、寄稿予定者の都合により掲載を中止します。つきましては、皆様に**寄稿者**(国際学部出身者で国内外の他大

⁴ Pacific Coast Council on Latin American Studies (ラテンアメリカ論の太平洋岸会議) 2006 年度コンフェレンス:テンアメリカにおける社会変化。カリフォルニア州立大学、11月3-4日、発表:“日本における日系ペルー人労働者:移民社会変化”(“Nikkei Peruvian Workers in Japan: Trans-Migratory Social Change”)

学院へ進学された方または修了された方)の**情報提供**をお願いします。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。 2007年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 今回は、国際社会研究専攻第7期生 中村祐司研究室・森 三奈さんと国際文化研究専攻第4期修了生 佐々木一隆研究室 OG・田中瑠美さんをお願いしました。

「ウィーン便り」

森 三奈

私は現在宇都宮大学国際学研究科修士課程を休学し、2006年10月よりロータリー財団の奨学生としてウィーン大学で社会学の修士コースを履修しています。2年間のプログラムなのでウィーンへ出発してからはほぼ1年目が経ちます。ウィーン留学のきっかけは宇都宮大学の交換留学でドイツのエアランゲン大学で一年間勉強する機会を得たことです。卒業後、大学院に進み中村祐司教授から指導をいただきました。ドイツ語圏でさらに社会学を学びたいと思っていたとき、他の先生から紹介をいただき、ロータリー財団の奨学金に応募しました。ロータリー財団の奨学金には様々な奨学金のプログラムがありますが私が受けているのは国際親善奨学金プログラムです。このプログラムでは奨学生が学業で成果を挙げるとともに、異文化理解、奉仕活動などの親善大使としての役割も同時に求められています。

夏学期からは社会学の授業に加え、指導教官のゼミに参加して修士論文の執筆準備を進めています。ゼミに参加している学生は10人程でお互いの論文のテーマについて報告と情報交換をし、先生からアドバイスを受けています。ゼミの中では一人当たりの時間が限られているため、また、言語の問題でどうしても他の学生よりも遅れを取るため、先生に特別に時間を作っていただいて指導を受ける週もあります。オーストリア学生から私の日本での論文のテーマについて、あるいは彼らのテーマにおいて日本ではどうなのかと質問されることもよくあります。ドイツのエアランゲン大学では語学が中心だったので今回、社会学の授業やゼミに出席することはとても新鮮です。

私のテーマは都市計画における住民参加ですが、研究は文献だけではなく、実地の研究も必要とします。これまでウィーン市の職員の方々、住民参加に携わっている方々にインタビューを行ないました。最初のインタビューの方は指導教官の先生から推薦していただきましたが、その方から他の方を紹介していただき、さらにその方から他の方を紹介していただく・・・というようにインタビューがこれまで続いています。ウィーンには人脈が全くなく、初めは実地研究に不安を感じていましたが無事に進めることができています。どの方も快くインタビューを受けてくださり、文献だけでは知りえなかったプロジェクト内の成功点、失敗点などを聞くことができ、大変興味深い内容で自身ではとても満足しています。このインタビューでの成果を論文に活かしたいと思います。

ウィーンの中心街は常に観光客であふれ、活気に満ちています。中心街は歩いて回れる

ほどの大きさに歴史的遺産が至るところにあり、町全体が世界遺産のようです。ウィーン市内の公共交通機関は市民の移動手段として大変よく整備されており、快適だと思います。例えば、運行数の多さ、路線網の充実、障害者やお年寄りに使いやすい設備、エリア内均一の料金、デザインなどソフト面、ハード面両方においてです。ウィーンを中心街は観光バスなどのために渋滞がウィーン市の大きな課題となっていますが自動車交通を抑制し、公共交通機関を整備し、都市の活性化を図ろうとする姿勢が感じられます。ウィーンを中心街は賑わっていますが一步郊外に出るとドナウ川が流れ、自然が広がっています。天気の良い週末などはドナウ川沿いを散歩して過ごすこともあります。ウィーンのこの環境はとても気に入っています。

ウィーンに到着してすぐはビザや入学申請など一人では難しいことがいくつもあり、落ち込みそうになりましたが、現在はウィーンに来てから知り合いになった友人に支えてもらいながら元気に生活しています。宇都宮大学で勉強することができたからこそ今のウィーンでの自分があると思っています。先生、友人など今まで支えてくださった方々に感謝し、残りの一年間を過ごしたいと思います。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第7期生)

「火曜日の場合」

田中 瑠美

私がチェコのパラツキー大学に来てから早いもので間もなく2年が過ぎようとしています。パラツキー大学はチェコの首都、プラハから東に250kmほどのオロモウツという町にあります。オロモウツは重要文化財がプラハの次に多い、歴史的で落ち着いた町です。

日本語学科は哲学部に属していて、現在学生は100名近くいます。教師は常勤のチェコ人1名、日本人2名と、プラハから隔週で来る2名のチェコ人の合計5名います。学年にもよりますが、基本的に学生たちは日本語の「文法」「会話」「文学」「歴史」「地理」「漢字」「作文」などを学んでいます。その中で、私が担当しているのは1年生と2年生の会話、1年生の漢字、2年生の作文の授業で、全部で一週間に6コマあります。

今回は、火曜日の場合を例にチェコでの1日をご紹介します。

朝。近くの教会で7時を知らせる鐘がなりました。1日の始まりです。

今日は火曜日。2年生と1年生の会話が1コマずつです。

事務室へ着くとまず、提出された宿題のチェックから始まります。大学生にもなって宿題かと思われるかもしれませんが、特に漢字や作文の場合、継続的にチェックして間違いを直さないと変な癖がついてしまうので、1・2年生のうちは必ず毎週出すようにしています。ほぼ全員が毎回真面目に宿題を出すことから見ても、日本語学習への意欲の高さを感じます。そして、宿題のチェックもそこそこに、2年生の会話クラスに向かいます。

チェコで日本語を教えていると言うと、「チェコ語（もしくは英語）で教えるんですか？」と聞かれることがよくあるのですが、私のクラスは全て日本語だけで行います。というのも、学生たちは文法や文学などの授業をチェコ語で受けているので、私のクラスでは日本語を「使う」ことに重点を置いているからです。会話の授業なのだから、日本語だけで行うのは当たり前なのですが、中には授業中にチェコ語や英語で質問をしてくる学生もいるので、そんなときには「私は日本語だけしか分かりません」と言うことにしています。それは、ここで教え始めた年に経験したあることが大きな理由です。ある日の授業で、私に日本語で質問をしてきた1年生の学生に、英語で答えてしまったことがありました。せっかく学生が勉強したばかりの日本語を使って質問してきたのに、教師である私が日本語でコミュニケーションをしないなんて、何てことをしてしまったんだろうと反省したものです。そのときから、授業中にはどんなことがあっても、日本語だけを使うことにしました。ささいなことですが、こうした、どうしても日本語を使わなければいけない状況を作り出すことが、日本人の日本語教師である私がチェコの大学で「会話」を担当する1つの意味なのではないかと思っています。

2年生の会話が終わると、同じ教室で1年生の会話が始まります。日本のようにお昼休みのようなまとまった時間はなく全ての授業と授業の間が15分なので、始めのうちは慣れませんでした。今はすっかり慣れました。教室の外では、授業を終えた2年生とこれから授業の1年生が雑談をしていたりと賑やかです。1年生の授業であっても、授業中は日本語だけです。ですが、学生たちは文法の時間に勉強したばかりの文法を使って日本語での会話を楽しんでいるような印象を受けます。

1年生の授業が終わると、私の今日の授業は終わりなのですが、事務室に帰ると提出された宿題があるので、そのチェックと明日の授業の準備に追われます。まだまだ新米教師のため宿題のチェックや授業の準備には大変な時間がかかりますが、それでも、授業中の学生たちの熱心な様子を見てみると、ついつい時間を忘れて仕事をしてしまいます。

毎週火曜日の19時から、日本語学科の学生主催「日本クラブ」の催し物があります。「日本クラブ」の活動は、皆で日本の映画を観たり、卒業生に日本のサブカルチャーなどの講義を受けたり、折り紙のワークショップをしたりと、様々です。そして、その後は皆で「居酒屋学校」に行きます。「居酒屋学校」というのは、ある学生が考え出した言葉で、今やほとんどの日本語学科の学生が知っている言葉です。読んでそのまま、「居酒屋の学校」です。居酒屋学校では日本語・チェコ語が入り乱れて、それはそれは賑やかです。その日勉強したばかりの文法を使って話をしてみようとする学生。間違えたことや、聞いたことのない単語をその場でメモしている学生。分からない言葉を先輩に教えてもらいながら、日本語で話しかけてくる学生。日本への留学の夢を一生懸命に話す学生。日本語で表現できることはまだまだ限られていますが、それでも日本・日本語が大好きで、一生懸命に言いたいことを伝えようとする学生たちの姿を見ると、今度の授業ではこんなことをやってみようとか、私も負けずに頑張ろうなどと、授業のアイデアやエネルギーをもらう

こともしばしばです。ある学生に、「先生がいないと居酒屋“学校”になりませんよ！だから一緒に居酒屋学校に行きましょう！」と言われたことがあります。しかし、居酒屋学校は私が“生徒”になれる場所でもあると思います。チェコに来たばかりのときには、“誰にも頼ることはできないから、自分で授業のアイデアを考えなければならない”という気持ちでいました。そのため、何をして良いのか分からずに授業のやり方が見えなくなってしまったときがありました。しかし、居酒屋学校で学生たちの意見や考え、日本や日本語に対する思いを聞いているうちに、私自身、次になすべきことが見えてくるのです。学生たちが今、何を考え何を勉強したがっているのかいつも教えてくれるのは、他でもない学生たち自身だったのです。それに気づいたとき、重くなっていた心が一気に軽くなったのを今でもよく覚えています。学生たちは私を「先生」と呼びます。しかし、私にいろいろなことを気づかせてくれる学生たちは、学生であると同時に私の「先生」でもあるのだと思います。

居酒屋学校が終わる頃にはトラム（路面電車）の終電がなくなることもしばしばです。そんなときには、皆で歩いて帰ります。そのときにも、やはり日本語とチェコ語が入り乱れた賑やかさは衰えを知りません。本当に学生たちの元気と日本・日本語への熱意には圧倒されてばかりです。

アパートに戻ると、近くの教会の鐘が0時を知らせるためになり始めました。明日は水曜日。4限目から2年生の会話の授業があります。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第4期修了生)

◎ 海外帰国の留学生、海外居住者の会員の皆様へ

現在、知求会会員が290名います。国際社会研究専攻と国際文化研究専攻は第9期生、国際交流研究専攻は第4期生までがその会員対象者です。今年の3月末日での修了生は187名です。その修了生の外国籍者はほぼ4割という内訳構成になっています。国籍は中国・韓国・モンゴル・ベトナム・マレーシア・パラオ・ブルガリア・ペルー・アゼルバイジャンです。なお、中国・韓国の出身者が最も多い比率になっています。会員の皆様との通信手段は電子メールにしています。これは知求会が同窓会費を徴収していないという経済的理由ばかりではありません。国籍、ことばを変えれば民族・文化の違いを考慮してのことです。編集後記の内容にぜひ注目して下さい。**連絡先の情報は知求会の財産なのです。**

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い：**
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会